

Wakayama University Tourism Update

Semiannual Newsletter of Tourism Education & Practice

WTU Spring/Summer 2026



Sharing Experiences

Contents – 目次 –

1. Reports – 和歌山大学観光学部生の国際 / 地域活動報告 –
2. Topics – 過去のイベントとニュース –
3. Future Events – 今後のイベント紹介 –

■ 石垣島北部エリアにおける新規宿泊事業の立案と地域課題へのアプローチ

～地域連携プログラム（LPP）：国立公園・石垣で学び、考える、
観光ビジネスによる地域活性化（沖縄県石垣市）

深津 美羽さん（学部4年生／愛媛県立西条高等学校出身）



私たち石垣島 LPP は、人口減少や少子高齢化が進む石垣島北部エリアに新たな人の流れを生むべく、この一年間、新規事業の立案に取り組んできました。活動の指針としたのは、日本政策金融公庫の創業計画書です。8月の現地フィールドワークでは、石垣市役所へのヒアリングを通じて、オーバーツーリズムや二次交通の課題、さらには気候変動が観光に与える影響など、島が直面するリアルな現場を肌で感じることができました。

フィールドワークを終え、私たちが着目したのが、北部の宿泊施設不足という課題です。北部には現在 13～15 軒ほどの宿しかなく、観光客がこの地の豊かな自然をじっくり堪能するための基盤が不足していました。そこで私たちは、近年のサウナブームを追い風に、北部の自然の中で心身を整える「サウナ併設型宿泊施設」による滞在価値の向上を提案しました。

具体的な検討案として、まずは「プライベート重視の一棟貸し形式」を構想しました。これは 2～6 名の若年層グループをターゲットに、サウナと地元の食体験を組み合わせたモデルです。北部の飲食店不足という弱点をカバーするため、島野菜や八重山そばの調理キットを提供し、SUP やカヤックといったアクティビティをセットにすることで、他にはない自炊型の滞在スタイルを目指しました。一方で、もう一つの案として検討したのが「交流を軸としたゲストハウス形式」です。こちらは 1～2 名の少人数旅行者を対象とし、送迎サービスや食事の時間を通じて、宿泊者同士や地域との自然な繋がりが生まれる仕組みを重視しています。個室でのプライバシーを確保しつつ、連泊プランによって「関係人口」としての長期滞在を促す、北部では珍しい交流拠点の創出を狙いました。

しかし、計画を練るほどに一つの大きな問いに突き当たりました。それは、現在北部の宿の半数以上を占める「一棟貸し」が持つ安定した収益性と、私たちが理想とする「ゲストハウス」が持つ交流の創出をどう両立させるかという点です。地域に新しい人の流れを生むためには交流が不可欠ですが、ビジネスとして持続させるためには収益の安定も譲れません。この「持続可能な事業設計」の難しさを知ったことこそが、本プロジェクトにおける最大の学びとなりました。

石垣島 LPP としての活動は 2025 年度で終了となりますが、一年間の試行錯誤を通じて、地域の課題を自分事として捉え、論理的な解決策を導き出すプロセスを深く体験することができました。この提案が、石垣島北部の豊かな自然と人流創出を考えるうえで役に立つことができれば幸いです。



■ 棚田は「命を守る教室」へ ～棚田再生から広がる防災学習の新展開～

～地域連携プログラム（LPP）：棚田を学ぶ・棚田で学ぶ 教育要素を取り入れた体験観光
（和歌山県海草郡紀美野町）

石川 麻夢さん（学部4年生／北海道室蘭清水丘高等学校出身）

■ 伝統的な景観の裏にある切実な課題

和歌山県紀美野町小川地区。ここには、600年の歴史を持つ中田の棚田が広がっています。紀美野町小川 LPP は、この棚田をフィールドに、地域住民の方々や地域おこし協力隊の皆さんと協働して地域課題に取り組む実践型プログラムです。

棚田は日本の原風景とも言える高い景観的価値を持っていますが、その維持には膨大な労力を要します。小川地区も例外ではなく、高齢化による担い手不足、草刈りや水路整備といった管理負担の増大、そして維持のための経済的基盤の弱さという、全国の棚田が直面する切実な課題を抱えています。

■「守る」から「活かす」への転換

2024年度までの活動では、主に棚田の維持管理と地域交流に注力してきました。田植えや稲刈りなどのイベントに加え泥にまみれての畦の補修や、照りつける太陽の下での草刈り。一見地味な作業の積み重ねが、この美しい景観を下支えしていることを身をもって学びました。また、観光学部の学生として「地方観光地におけるSNSの活用」をテーマに研究を行い、棚田の魅力がどのように外部へ届くのかを分析してきました。

2025年度、私たちの活動は大きな転換点を迎えました。それは、棚田を単なる農地や観光資源として「守る」だけでなく、地域が抱える最大の懸念事項である「防災」と結びつけ、「学びの場（教室）」として再定義する取り組みです。

■棚田を教室にした「防災 × 生涯教育」の実践

紀美野町のような山間地域では、豪雨や土砂災害によって道路が寸断され、集落が孤立するリスクが常に隣り合わせです。しかし棚田には命を繋ぐ「米」があり、燃料や道具になる「竹」があり、生活を支える「水路」があります。そこで私たちは、棚田というフィールドを「地域が自ら生き延びるための資源が集まっている場所」と捉え直しました。

2026年1月18日に開催したイベントでは当日は地域住民の方々や外部参加者（大人9名、子供4名）と共に、棚田を歩きながら防災に関する知識を深める「防災クイズラリー」を実施しました。さらに、地域にある資源を活用する実践として、竹を切り出して「竹飯ごう」を製作。棚田で収穫されたお米を炊き、全員で囲みました。

この活動の最も大きな成果は、世代を超えた「学び合い」が生まれたことです。地域の方からは過去の災害経験を教わり、子供たちは楽しみながら地域の資源について知る。机上の空論ではない、身体感覚を伴うこのプロセスを通じて、棚田は「農業の場」を超え、地域の文化と知識を共有する「公共空間」へとアップデートされました。

■これからの展望：地域の未来を創る「場」として

LPP活動を通じて確信したのは、地域課題の解決には「作業・交流・学び」が三位一体となって組み合わさることが不可欠だということです。棚田を再生することは、単に米を作る環境を整えることではありません。地域の人が集まり、誇りを持ち、地域の未来について共に語り合える「場」を守り続けることなのです。

学生主体の「L活」として再出発する2026年度は、この防災学習をさらに深め、より多くの人を巻き込む場づくりに挑戦したいと考えています。

小川地区の皆さんと共に、棚田の新しい歴史を刻んでいけるよう、メンバー一丸となって力強い風を吹かせていきたいと思えます。

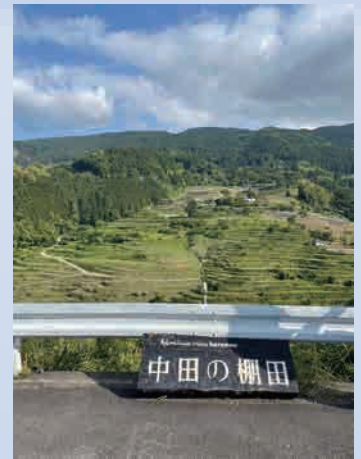
■ 公共空間から始まる、まちの居場所づくり

～地域連携プログラム（LPP）：まちなかの地域資源と公共空間を活用した
和歌山市駅前のまちづくり（和歌山市南海和歌山市駅周辺地区）

高原 優那さん（学部4年生／姫路市立琴丘高等学校出身）

市駅まちづくりLPPは、一般社団法人市駅グリーンプロジェクト（以下GGP）と連携し、南海和歌山市駅周辺の、公共空間を活用したにぎわい創出に取り組んでいます。GGPが目指しているのは、和歌山市駅周辺のまちを、にぎわいと憩いに満ちた「リビング（居間）」のような場所に変えることであり、その実現に向けて、私たち市駅まちづくりLPPは学生の視点で公共空間の新しい使い方を実践的に模索しています。

GGPによるその大きな仕掛けが「市駅ストリートガーデン」の設置です。歩道の一部に天然芝を敷き、ベンチを設置し、





誰でも自由に過ごせる空間を創出しています。こうした日常的な滞留空間の整備に加えて、人々に活動を認知してもらう機会創出のためにイベントも企画実施しています。前年度に私たちが行なったイベントとして、「市駅 X 'mas ナイトフェスタ」を紹介します。このイベントは、JR 和歌山駅から和歌山城までの街路樹に施されるイルミネーション「KEYAKI LIGHT PARADE」が、2025 年に和歌山市駅まで拡張されたことを受け、和歌山市駅エリアでもイルミネーションストリートを盛り上げようと、初めて実施されたものです。駅前広場や歩道を活用し、スタンプラリーやポトフの販売、ミニクリスマスツリーづくり体験を行いました。当日は芝生のベンチでくつろぐ人や、ストリートガーデンを回遊する人の姿が多く見られ、駅前に自然なにぎわいと滞留が生まれました。

こうした取り組みは、2014 年から続く地域の商店街、自治体、永瀬ゼミによる社会実験やイベントの積み重ねの延長線上にあります。2025 年度をもって永瀬准教授は本学を離れられることとなりましたが、これまでの地域との連携を継続させ、さらに発展させていくために、立ち上がったのが、本 LPP です。

本 LPP は、参加する学生がお客様としてではなく、企画立案から設営、運営、片付けに至るまでを担う当事者として活動に関わります。イベントで実施するコンテンツ案も、GGP のみなさんの現実的な視点で評価をいただき、試行錯誤を重ねながら実際に公共空間で形にしていきます。公共空間に居場所をつくることは、それが誰かの居場所になると同時に、活動に関わる学生自身の居場所にもなり得ます。メンバーが活動を通して、少しずつ、まちの中に自分の居場所を見つけられる、そんなやりがいがある取り組みを実現していきたいです。

■ 森の恵みを次世代へ—地域塾構想とこれからの龍神 LPP—

～地域連携プログラム（LPP）：地域塾による龍神村の資源を活かした山村活性化（田辺市龍神）

上原 ひかりさん（学部3年生／鎮西学院高等学校（長崎県）出身）

鈴木 愛乃さん（学部4年生／愛知県立半田東高等学校出身）

宮下 咲良さん（学部4年生／飯田女子高等学校（長野県）出身）



田辺市龍神は古くから林業が盛んな地域であり、林業は主要産業として地域に根差しています。私たちはそんな龍神村をフィールドに4年前から活動しており、森林がもたらす恩恵を発見できましたが、同時に後継者不足や獣害などの林業を取り巻く問題も明らかになりました。私たちはこれらの問題を解決するには地域愛と相互理解を深めることが重要だと考え「地域塾構想」を地域の方々に提案させていただきました。

2025 年度は9月にメンバー全員で龍神村を訪問しました。訪問にあたり8月に事前学習を学内にて行いました。和歌山県の職員の方をお招きして林業について学びを深めました。ここでは、林業がただ木を切り木材を作るだけではなく、特用林産物など森林の恵みがもたらす資源による収入があることも学びました。

また一泊二日で行った現地訪問においては、実際に林業の作業の様子や特用林産物の生産の場などを見学させていただきました。言葉で聞くのとは違った林業の壮大さや作業員の方の巧みな技にとっても驚きました。龍神村には至る所で木材が使われており、本当に林業で成り立っている地域なのだと感じました。林家の方々や龍神村の森林に関わる方々はその仕事にとっても誇りを持っているように見えました。

また夏休みに行った龍神での現地訪問を振り返るため、メンバーで資源地図作成のワークショップを行いました。「学びの場としての龍神」をテーマに、各自が印象に残った場面の写真を持ち寄り、そこから得た学びや心に残った点を発表しました。同じ場面の写真であっても、着眼点や魅力の捉え方が人によって異なり、新たな気づきを得られたことがとても印象的でした。ワークショップを通して、龍神の「資源」や「課題」、「魅力」

が可視化され、現地訪問で得た学びを整理することができました。改めて龍神の温かさや人々の思いを実感できる、非常に有意義な時間となりました。

一方で、私たちが提案した「地域塾構想」は地元の中高生を対象としていましたが、関係者へのヒアリングを重ねる中で、参加者募集の難しさや、準備のためにメンバーが頻繁に龍神村へ足を運ぶことの負担など、継続に向けた現実的な課題が明らかになりました。理想を形にするためには、熱意だけでなく、地域の実情や持続可能性を踏まえた仕組みづくりが不可欠であることを実感した一年でもありました。

私は1年次から龍神LPPに参加しており、活動を通して龍神の魅力と林業が抱える課題の双方に向き合ってきました。だからこそ、より多くの人にこの地域の価値を体感してもらい、学びの場としての龍神を次世代へつないでいきたいと考えています。今後は後輩のメンバーとも対話を重ねながら、活動が継続できる形を模索し、LPPの活動を発展させていきたいと思えます。(文責：宮下)

■ Global Intensive Project (GIP) - Global Learning Activity :

～ Intensive English Learning in Australia

(Griffith University, Griffith English Language Institute (GELI))

鳥越 遥陽さん (学部3年生/岡山県立岡山芳泉高等学校出身)

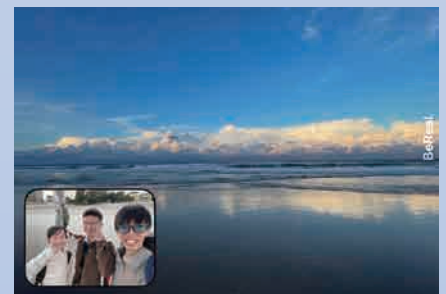
新田 温希さん (学部3年生/愛知県立豊橋東高等学校出身)

秋山 実日子さん (学部3年生/大阪府立豊中高等学校出身)

私たちはオーストラリアのクイーンズランド州南東部の都市、ゴールドコーストにあるグリフィス大学付属の語学学校で5週間の語学研修を行いました。大学では日本人はもちろんのこと他の国から来た学生と一緒に英語の授業を受けました。事前に学生の語学レベルに合わせたクラス分けが行われ、自分にあったレベルの授業を受けることができました。普段の講義とは違い先生からの一方的なものではなく、ペアワークやグループディスカッション、クラスによってはプレゼンテーションが授業の中で多く行われ、日本の授業では体験できないほどのスピーキングのレッスンになりました。授業の内容は文法などの基礎的なところから、英作文の書き方などバランスよく英語の技能を扱っていました。放課後には学校主催のイベントがたくさんあり、カンガルーのたくさんいる自然公園の探検ツアーや、クラス単位でのピクニックのようなものに参加しました。ここでクラスメイトとの国際的な交流を増やしたり、オーストラリア特有の自然や文化に触れたりすることができました。5週間の現地滞在中は、ホームステイを体験しました。3人とも別々の受け入れ先だったのですが、どのファミリーも温かく受け入れてくれて不自由なく生活をさせてくれました。休日にはファミリーと一緒に出かけをしたり、ご飯を一緒に食べたりしました。また一緒に参加した観光学部生3人で、ゴールドコーストの隣の都市、ブリスベンに電車で行き、博物館やお祭りを楽しみました。クイーンズランド州内であれば電車や、トラムと呼ばれる路面電車、バスが1回50セント(約50円)で乗れたので、いろいろなところに遊びに行けました。この5週間の語学研修を通して、私たちは英語を学ぶだけでなく、異なる文化や価値観の中で生活し、人と関わることの大切さを実感しました。授業や放課後の活動、ホームステイでの生活を重ねる中で、言葉が完璧でなくても、自分の考えを伝えようとする姿勢がコミュニケーションにおいて重要であると学びました。

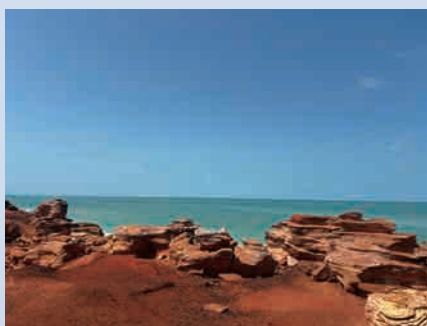
オーストラリアでの経験は、帰国後の大学での学びにも大きく役立っています。以前よりも積極的に英語で発言することを意識するようになり、授業内プレゼンテーションでオーストラリアを事例として取り上げ、現地での体験をもとに観光地の魅力や課題、地域の人々との関わり方について、観光学の視点から考えを深めることができました。

今回のオーストラリアGIPで得た経験は、今後の大学での学修や観光分野の活動でも、自分の視野を広げ、より実践的に学んでいくための大きな糧になると考えています。この経験を生かし、国や文化の違いがあっても、コミュニケーションを取りながら、さまざまな人と協力し合って物事に取り組めるように頑張ります。



■「知りたい」を世界へ繋ぐプロセス

片田江 奏花さん（学部4年生／立命館宇治高等学校（京都府）出身）



西オーストラリア州のカーティン大学での交換留學生生活を通して、私は二つの大きな問いに向き合ってきました。それは「自分自身の再定義」と「観光の意味の再構築」です。

日本にいた頃、私は自分なりに積み上げてきたスキルや経験という「武器」を持っていると自負していました。留学のために取得した語学スコアや、大学で学んできた専門知識。しかし、一步外の世界へ踏み出すと、それらは決して特別なものではありませんでした。三ヶ国語を自在に操る学生や、多様な宗教・価値観の中で育ってきた仲間と困れる中で、私が「努力して身につけた」と思っていたものは、彼らにとっては当たり前の前提条件に過ぎなかったのです。スキルや属性という鎧を取り払ったとき、自分に何が残るのか。この問いに直面したとき、私は自分の「無知」を認めざるを得ませんでした。何もできない自分、何も知らない自分を認めることは、とても勇気がいることです。しかし、その時に感じた「怖さ」こそが、私の転換点となりました。自分の世界がいかに限定的であったかを知り、「自分を過信することの危うさ」に気づいたことは、本当の意味での自己理解の原点となりました。

この「無知の自覚」は、観光体験を通して突きつけられました。西オーストラリア州北部のブルームを訪れた際、真珠採取産業に貢献した日本人移民の「光」と、第二次世界大戦時に爆撃を行った日本軍という「影」が、同じ土地に重なり合っている現実を知りました。教科書にはない知識は、現地の空気や人々の語り、場の記憶に触れてはじめて実感されるものだ痛感しました。この経験を通して、私は学問的知識以前に、人間としての歴史認識や世界理解において、日本人として、いかに狭い視野の中で生きてきたかを思い知らされました。日本人として、そして一人の人間として、何も知らない自分を恥じ、同時に「もっと深く世界を知らなければならない」という強い欲求が湧きました。

これらの経験から、私の中で観光学を学ぶ意義が大きく変わりました。観光とは、単なるレジャーや消費行動ではなく、自らの五感を通して、未知の世界を受容し、それまでの自己認識が揺さぶられるプロセスそのものだと感じるよ

うになったのです。この留学を通して、私は自分自身と観光の意味を新たに定義し直すことができましたと思います。

世界を知ることは、自分自身を更新することでもあります。そして、観光とは、異質な世界や他者と出会うための入口であり、固定化された自己認識を解体し、新たな生の選択肢を生み出す契機となりうると思います。だからこそ、観光を学ぶことは、単に産業構造やビジネスモデルを理解することだけではありません。異なる文化や歴史、社会構造と向き合い、それらを自分なりに理解し直し、社会や自分自身の中にどのように位置付けるかを考える営みだと考えています。私はこれからも、知らないものに出会うことを避けるのではなく、学び直す機会として受け取り続けたいです。その積み重ねが、自分の思考や視野を更新していく力になると信じています。

■アメリカ College of the Desert への留学を通して得た学びと成長

石野 莉奈さん（学部4年生／岡山県立岡山城東高等学校出身）



私は、2025年1月から12月までの約1年間、アメリカのカリフォルニア州にある College of the Desert へ私費で留学しました。中学生の頃から海外で学ぶことを一つの目標としてきたので、その長年の夢を実現する機会となりました。中でも College of the Desert は、ホテルやレストランのホスピタリティに特化した授業を数多く提供しており、観光学部で培ってきた知識を実践的に学べる環境であると感じ、この大学を選びました。言語や文化の異なる環境に身を置くことは決して容易ではありませんでしたが、この留学経験は、観光を多角的に捉える視点と、自分自身の成長につながる大きな転機となりました。

留学先では、「Tourism Law」や「Food and Beverage Management」など、観光・ホスピタリティ分野に直結する実践的な授業を履修しました。「Tourism Law」では、観光に関わる事例をもとに、アメリカの法律に基づいて自分の意見を述べ、議論を行いました。法制度や考え方に触れることで、観光を支えるルールや責任について深く考える機会となりました。また、「Food and Beverage Management」の授業では、レストランの机配置や調理場のレイアウトを考え、いかに効率よく運営し、多くの顧客に満足してもらえるかを検討しました。理論だけでなく、現場を想定した学びができたことは、観光学部での学修とも強く結びついていると感じています。

一方で、アメリカの文化や授業スタイルに慣れるまでには苦労もありました。感情や意見を率直に表現する文化の中で、英語が思うように話せず、もどかしさや悔しさを感じる時期もありました。しかし、そこで立ち止まるのではなく、積極的に現地の学生や教員と関わることを意識しました。その結果、帰国前には相手の話を理解できるようになり、自分の意見を自信を持って発言できるようになりました。

また、現地での関わりを通じて、インターナショナルクラブのInstagram運営を担当する機会をいただいたほか、イベント運営にも携わらせていただきました。授業外でのこれらの経験は、自ら行動することの重要性和、その行動が新たな学びや成長につながることを実感する貴重な機会となりました。

留学生活では、文化や「当たり前」の違いに戸惑うことも多くありましたが、異なる文化や考え方を持つ学生たちと共に生活する中で、新しい発見が多く、日々刺激的で楽しい時間を過ごすことができました。また、そうした経験を通して、それぞれの文化や価値観への理解を深めることができましたと感じています。

さらに今回の留学では、学業面だけでなく、異文化の中で生活することを通して多くの力を身につけることができました。新しい環境に素早く適応する力や、自ら行動を起こし、前向きに物事に取り組む姿勢は、この留学を通して培われた大きな成長の一つです。この1年間の留学で得た学びと経験を、今後の観光学部での学修や将来に活かしていきたいと考えています。



■ 和歌山大学観光学部で広がる国際的な学び

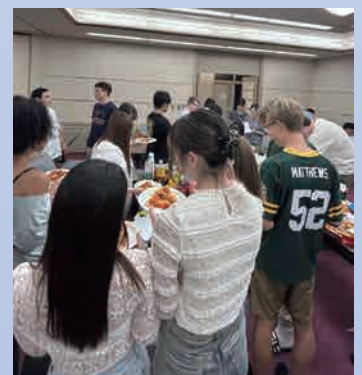
猿田 夏実さん（学部4年生／茨城県立水戸第三高等学校出身）

私は、滋賀県彦根市にあるミシガン州立大学連合日本センターで実施された約10日間の国内留学プログラムに参加しました。センターには日本語を学ぶアメリカ人学生が滞在しており、私も同じ寮で生活しました。滞在中はアメリカ人学生とルームシェアも行いました。

授業は日本人学生を対象にすべて英語で行われ、英語劇や模擬国連会議、イギリス神話をテーマとした学習などが中心で最終日には日本の文化紹介をテーマとしたプレゼンテーションを行いました。平日は授業に取り組み、休日には仲良くなった友人たちと時間を過ごしました。

このプログラムを通じて学んだことが2点あります。1点目は、言葉にして伝えることの大切さです。アメリカ人学生は日常の中で「元気?」「楽しんで?」と気軽に声をかけてくれ、最終日のプレゼンテーション前には「頑張ってるね」と何度も励ましてくれました。また、分からないことがあると「ここが分からないから手伝ってほしい」と自分の状況を言葉にして伝えてくれました。その姿に影響を受け、日本人学生も分からないことを積極的に言葉にするようになり、学び合う環境が自然と生まれていったと感じています。

2点目は、置かれた環境から何を得られるかは自分次第だということです。このプログラムでは自ら話しかけ、積極的にコミュニケーションをとることで、徐々に英語を話すことに対する不安がなくなっていました。日常的に英語を話したい、英語でもっとコミュニケーションをとりたいと思っていた自分にとって、この経験は、Global Program（以下、GP）で留学生と関われる環境の貴重さにも改めて気づき、これまで受け身だった自分の姿勢を見直すようになりました。



私が違う国籍をもつ人との交流に抵抗なく、前向きに楽しめているのは、観光学部での学びや GP の存在が大きいと感じています。観光学部には多様な出身地をもつ学生が在籍しており、授業や日常生活を通して、自分が育ってきた環境や文化とは異なる価値観に触れる機会が多くあります。また、GP 学生として英語で行われる授業を受講する中で、留学生と意見交換を行う環境にも恵まれています。こうした環境での学びを通じて、多様な価値観を受け入れ、相手を理解しようとする姿勢が培われました。

今回の国内留学で得た学びは、英語力の向上だけでなく人と向き合う姿勢や観光学部生としておかれている環境を見つめ直すきっかけにもなりました。これからも国内留学や観光学部での学び、GP での経験を生かし、多様な価値観をもつ人々と積極的に関わりながら自分自身の可能性を広げていきたいです。

Topics –過去のイベントとニュース–

■ 2025 年度学位記・修了証書授与式が執り行われました



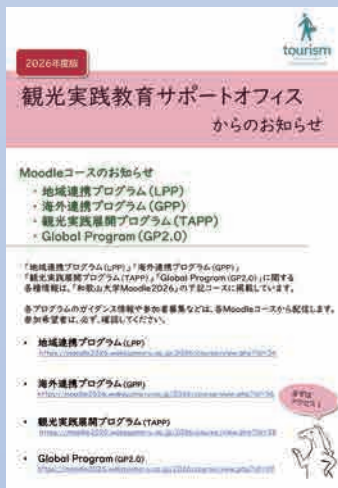
2026 年 3 月 25 日（水）、2025 年度学位記・修了証書授与式が執り行われ、観光学部生 121 名、大学院観光学研究科博士前期課程 10 名、専門職学位課程 7 名、博士後期課程 3 名が、それぞれ学士・修士・博士の学位を取得し、新たなステージへと旅立ちました。

和歌山ビッグホールにて学位記授与式が、その後、栄谷キャンパス西 4 号館 T101 教室に場所を移して、各種表彰式（学部成績優秀者表彰、卒業論文賞表彰、修士論文賞表彰、実践論文賞表彰、ピアサポート表彰、学部長表彰・研究科長表彰、GP Completion Certificate 授与、観光学部教員表彰）が執り行われました。

卒業生・修了生皆様の今後のご活躍を期待しています。

Future Events –今後のイベント紹介–

■ 「LPP ガイダンス」「GPP ガイダンス」「GP2.0 ガイダンス（GP WEEK 2026）」を実施します！（学部内限定）



「地域連携プログラム（LPP）」「海外連携プログラム（GPP）」「Global Program（GP2.0）」のガイダンスを開催します。

各プログラムの制度やスケジュール、参加申し込み方法などをお知らせします。関心のある学生は、必ず参加して、情報を集めておきましょう！

* いずれのガイダンスも、事前の参加申し込みは不要です。

* 各ガイダンスの日程などの詳細情報は、

新入生ガイダンス／在学生ガイダンスで配布する

「観光実践教育サポートオフィスからのお知らせ」や各 Moodle コースを参照してください。

* 2026 年度からは、新たに、プロジェクトベースの授業科目

「観光実践展開プログラム」（Tourism Advanced Practice-based Program: TAPP）を開設します（履修対象は 2 年生以上）。

詳細は Moodle コースをご覧ください。

編集・発行

(2026 年 4 月発行)

和歌山大学 観光学部 観光実践教育サポートオフィス

〒640-8510 和歌山市栄谷 930 和歌山大学西 4 号館 K216 室、K206 室

TEL 073-457-8553 / E-mail tourism-er@ml.wakayama-u.ac.jp / URL <https://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/>

* 本誌は Web ページからも閲覧できます→<https://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/fuzoku/tourism-education-research/wtu.html>

